

「国民の健康と医療を担う漢方の将来ビジョン研究会2023」を開催

2024年2月19日(月)18時より、KKRホテル東京(瑞宝)において「国民の健康と医療を担う漢方の将来ビジョン研究会2023」が開催された。

今回も、昨年につき、主に会場参加(限定的にオンライン配信)での開催となった。

今回は、代表世話人、世話人、委員等、研究会関係の先生方12名と演者3名および厚労省等のオブザーバー、共催の日本東洋医学会、会員会社等、会場で76名、オンラインが137名、総計213名の方々が参加した。

今回は、「コロナ後の医療における課題と漢方薬の必要性」をテーマとし、研究会提言に基づく進捗報告ならびに講演、最後にディスカッションが行われた。

まず、総合司会の本研究会代表世話人である、鳥羽研二先生(東京都健康長寿医療センター 理事長)により、フレイルの臨床症状等の解説も含め、開会のご挨拶があった。



【会場の様子】



総合司会
【鳥羽 研二 先生】

その後の研究会の概要は以下の通りである。



■ 研究会提言に基づく進捗報告

座長を世話人の合田 幸広先生（国立医薬品食品衛生研究所 名誉所長）が務め、今回初めてのご参加となる日本東洋医学会会長の三谷 和男 先生が「研究会提言における日本東洋医学会の取り組み」と題し、登壇した。

三谷先生は、全国82大学医学部・医学科で漢方医学の講義が行われている中、漢方医学の医師国家試験への出題要望書を提出したことを報告した。また、COVID-19と漢方薬に関する学会主導研究の内容や能登半島地震に伴う避難時での漢方薬の活用、および英文機関紙の国際展開やAMEDへの公募演題採択の実績に触れる等、研究会提言にもとづく進捗報告を行った。

最後に、2023年9月にオックスフォードで開催された、ISJKMという漢方医学に関する国際的なシンポジウムに日本東洋医学会会長として招待された経験を紹介した上で、東アジアの伝統医学のリーダーは日本であるとの自覚を持って進む決意を表明した。

■ 講演

続いて、世話人の高山 真先生（東北大学病院 総合地域医療教育支援部・漢方内科 特命教授）を座長に、3名の先生方にご講演をいただいた。それぞれのご講演の内容は以下の通りである。



座長
【合田 幸広先生】



【三谷 和男先生】



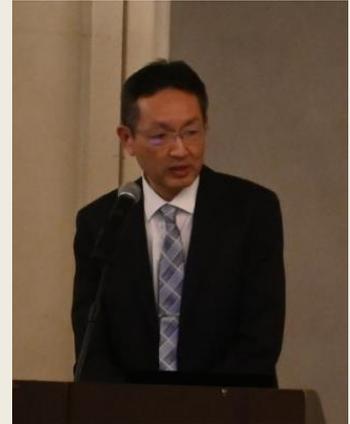
座長
【高山 真先生】

➤ 「日本東洋医学会提言書検討委員会 漢方フレイルスコア」

講演:石田 和之 先生 (中央大学保健センター 教授)

石田先生は、本研究会が発出した6つの提言を実現するために、日本東洋医学会が組織した「提言書検討委員会・政策提言委員会の活動」について紹介された。

また、フレイル治療に対する漢方薬の臨床的エビデンスの構築を目的とし、症例集積研究を行う際の指標となる漢方フレイルスコアについて概説された。



【石田 和之先生】

➤ 「補腎剤の抗フレイル効果 — from bench to bedside —」

講演:萩原 圭祐先生 (大阪大学大学院医学系研究科 先進融合医学共同研究講座特任教授)

萩原先生は、超高齢社会となった我が国において、フレイル対策は急務となっている現状を指摘した上で、漢方がフレイル対策で期待されていることをあらためて提言された。

続いて、フレイルは漢方的な概念である腎虚の症状に相当し、その代表処方である牛車腎気丸の、腎虚概念を基にした新たなフレイル尺度JFSを用いた臨床結果について解説された。

最後に、今後も、牛車腎気丸の抗フレイル効果のエビデンスを高め、フレイル対策に貢献していくとの考えを述べられた。



【萩原 圭祐先生】

▶ 「サルコペニア・フレイルに対する漢方薬補剤の可能性」

講演: 小川 純人先生 (東京大学大学院医学系研究科 老年病学 准教授)

小川先生からは、介護が必要となった原因の内、13.2%が高齢による衰弱等のフレイルであったとし、生理的予備能が低下することにより、生活機能障害、要介護状態、死亡等の転帰に陥りやすいリスクを指摘した。

そして、高齢者に有用性が示唆される漢方製剤として、補中益気湯、抑肝散、大建中湯を挙げた。中でも、補中益気湯に関して、LOH症候群*、骨格筋萎縮、NK活性の低下、インフルエンザ感染等に対する効果について報告された。最後に、フレイルにおける疲労・虚弱に使用され、症状や体力から使い分けが可能な複数の漢方処方について紹介された。

* LOH症候群: 加齢男性・性腺機能低下機能症



【小川 純人先生】

■ ディスカッション

講演終了後、世話人の秋下 雅弘 先生 (東京大学大学院医学系研究科老年病学 教授)、同じく堀江 重郎 先生 (順天堂大学大学院医学系研究科 泌尿器外科学 教授) のお二人を司会として、ディスカッションが行われ、活発なご発言や意見交換が行われた。



【ディスカッションの様子】



【秋下 雅弘先生】



【堀江 重郎先生】

まず、松本 吉郎先生(日本医師会会長)からは、「葛根湯や抑肝散は日本医師会災害医療チーム(JMAT)携行医薬品リストに入っており、また日医e-ラーニングの中にも漢方治療を加えた。日本医師会として、国民に安心安全な医療を提供するためにも、漢方薬をはじめとした重要な薬剤は適正な価格で医療保険制度の中で処方されていくべきである」などのご発言をいただいた。



【松本 吉郎先生】

また、欠席の河本 滋史先生からのご挨拶として、鳥羽先生の代読により「効果的で効率的な医療を目指す健康保険組合連合会として、漢方製剤によるフレイルの改善は、医療経済学的な観点からも有用であり、さらなる活用が図られるべきである」などの内容が紹介された。



【山本 信夫先生】

さらに、山本 信夫先生(日本薬剤師会会長)から、「テーマであるフレイルには大きな関心を寄せており、日本薬剤師会も連携して取り組んでいきたい。従来、慣習的に使用されていた漢方製剤が、そのエビデンスが発信されることにより、さらに広まっていくことを期待したい」などと述べられた。



【岡田 安史先生】

続いて、岡田 安史先生(日薬連会長)から、「フレイルのような多彩な愁訴の改善に用いられる漢方薬は非常に有用な薬剤であり、あらためて、様々な基礎・臨床研究が進んでいることを認識した。また、イノベーションの推進とともに長年にわたり国民の健康維持・向上に寄与している重要な薬剤に関しては、その価値を維持していくべきである」などのお言葉をいただいた。

アカデミアの立場からは、まず東田 千尋先生(富山大学和漢医薬学総合研究所研究開発部門・病態制御分野・神経機能学領域 副所長・教授)が、「漢方製剤は多成分系だが、実験デザインの精度を向上させるためにも、今後個々の成分の薬物動態に関するメカニズムとエビデンスの構築が求められる」などと指摘された。



【東田 千尋先生】



【伊藤 美千穂先生】

次に、伊藤 美千穂先生(国立医薬品食品衛生研究所 生薬部長)からは、「レギュラトリーサイエンスの研究に身を置く立場から、『フレイル』をもっと使いやすい効能として認められるよう、臨床の場から発信していただきたい」などと述べられた。

続いて、吉松 嘉代先生(国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所)は、「原料生薬の国内自給率は10%程度しかない現状の中、国産化を進めるために、課題である農家の収益性の改善に向けた、農水省をはじめとした国による支援体制の構築をお願いしたい」などと要望された。



【吉松 嘉代先生】

最後に、三谷 和男先生よりご挨拶があり、研究会は閉会した。

■記者会見

研究会終了後、20時過ぎより報道関係者(9社9名)を対象に、会見が行われ、鳥羽先生、三谷先生をはじめ、世話人を含め6名およびご講演された3名の先生方が参加された。記者の方々からは、各講演の内容について、今後の先生方の研究の方向性や展望について問う等、活発な質問が挙がり、関係する先生方が熱心に対応されていた。



【記者会見の様子】